か わ ら 版（新春号 NO 12 号 ） 2017/01/01 発行 年 2 回(1･7 月)	下関市立大学落語研究会OB会発行 大学同窓会のご厚意でバック NO 全てを HP で閲覧できます。地域の各同窓会活動報告とともに是非ご覧ください。 編集局局長 西 川 隆 喜

敷島の大和の国に日が昇り

飛ぶ鳥となり世界を制す （NO 7,0105）

(直訳)日本中に初日の出が昇り新たな年を迎えた。国の内外にある様々な問題に正面から立ち向かい解決し、世界の人々から高い評価を得ることができるスタートとなる年に

なってほしいものであるよ！

パワースポットの元乃隅稲荷神社(長門市油谷)　　下関あるかぽーと(後方に火の山、関門橋)

【2017 年　元旦　謹賀新年】

下関市立大学落語研究会 OB 会員・ご家族の皆様と新しい年を迎えることができ嬉しく存じます。本年も神のご加護が皆々様にあらんことを心よりお祈り申し上げます。

さて、米国では実業家の共和党トランプ氏が大統領として新任されることとなり日米同盟、とりわけ軍事について国民が絵空事ではなく現実的に議論できるようになったと

思われます。また、一連のオリンピック騒動を通して首都圏と地方の人々との間では微妙に温度差を感じられるようになりました。既にスポーツで「国威の高揚」を前面に期待する時代ではありませんし、もっと言えば各協会・選手のマスターベーションに過ぎないのかもしれません。東電の福島原発の一連の廃炉費用 22 兆円、オリンピックの概算費用 1.8 兆円・・・・・、いずれにせよ国民の税金が投入されることになります。本年度の国家予算は約 100 兆円、そしてアベノミクスの効果もあり税収は凡そ 57 兆円となっていますが、それでも差し引き 43 兆円は借金となります。挙句、国の借金は 1,000 兆円を超え更新中で日本の財政はほとんど破綻状態となっています。そこで、落語的な発想で恐縮ですが、いっそのこと日本を名古屋あたりで東日本・西日本の二つの大きな資本主義国に分離し、ロシアとの外交、東北復興・原発廃炉やオリンピックは東日本でやってもらい、中国・朝鮮との外交、沖縄問題及びや大分・熊本復興は西日本が行う・・・とし、二国でお互い切磋琢磨しより良い民主主義国家を目指すというのは如何なものでしょうか?　その方が政治家も国民も医療・健保や年金問題についても真剣に考えるようになり財政の健全化も進むのではないのでしょうか。　　（編集局）

【創部 45 周年記念懇親会 IN 博多に参加して】

昨年、6 月 25 日～26 日に志賀島で開催されました落研ＯＢ・ＯＧ会に行ってきました。年を取れば取るほど楽しみになってきます。先輩諸兄にお会いするだけで　なんか笑いがこみあげます。

　今回も　本来なら　「ＯＢ・ＯＧ会」は７月の予定でした。が、博多どんたくと重なるということで６月に。この日程は塾を経営している私の仕事上最も都合の悪い日でした。中学校の期末テスト期間がかぶっていたのです。３つの中学校の１年から３年まで受け持っており厳しかったのですが、そこは　なんとか乗り切り、当日指定された時間に新下関駅へ。

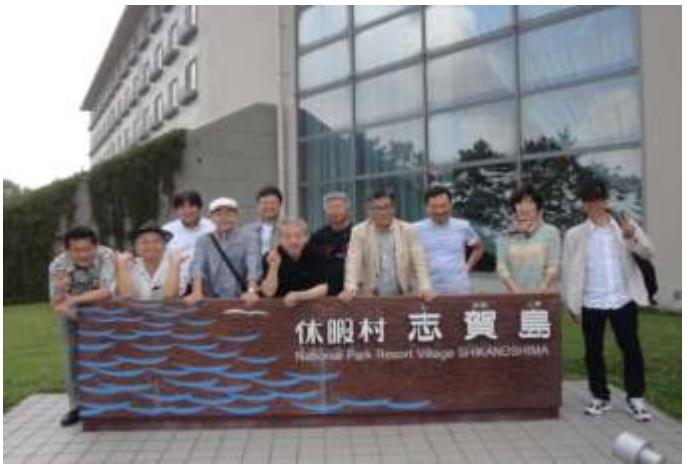
　笑司さんからは、出会った時に時刻などが詳細に印刷された行程表を渡されました。(下関→福岡までなのに、きちんとわかりやすく記載されてありました。過去の仕事振りの片鱗がうかがい知れます)

そして博多までは新幹線に乗りたかったのですが、在来線で行くことを知り　ちょっとショック！　時間がかかる！！　そしたら傍でニコニコ笑っている筒井さんが。道中みち連れが多いほうがいいですもんね(筒井さんは若いころ VAN とか JUN とかのアイビーで決めてお洒落な感じがします)。　そうこうしていますと下関のポスターの前で体操しているおじさんが・・・笑和さんでした。ゴルフ焼けという健康な肌で出迎えてくれました。

　４人で電車を乗り継ぎ、いざ志賀島へ。時間がかかると気に病んでいましたが、あっという間に西戸崎駅に着きました。その間　笑司さんは「金ちゃんの飛行機の時間

が・・・好志が駐車場で・・・((+_+))」などなど　ヤキモキしていました。みなさん、笑司さんに心配かけないでくださいね!

　そして道すがら　呂久笑さん(幸本くん)の欠席を知り、またショック！今まで完全出席だったじゃないですか。笑仲兄さんも来ないし、楽狂さんも　もちろん　さくらさんも。巣山さんも相当しつこくお誘いしたのですが、来れない・・・残念。参加者少ないな・・・と思ってホテルのロビーに座っていたら、来られました。晋平さんを先頭に落研御一行様、第二弾。わかりますね、ホテルのマイクロバス降りたとたん、不思議ですがオーラと言うしかない雰囲気を醸し出しています。到着したらとたんにホテルのロビーが賑やかになったということは言うまでもありません。



左より: 青山・有田・濱元・筒井・中山・松尾・尼子・　西川・大塚・千葉・沖井の各氏

常連の参加者が少ないとはいえ、今回は歓白・連発さんという後輩の参加があり、これは今までのOB会にとって大変な進歩だったと思います。(朗志さんの血の滲むような努力が報われました)

　ホテルの食事は美味しかったです。イカの生き造りはなかなか食べられないので嬉しかったですし、お部屋も私一人広々としたお部屋でカーテンを開けたら玄界灘が一望にでき、心が洗われるようでした。お風呂も最上階にあり、星空を眺めながら湯に浸って、しばし日頃の疲れを癒すことができました。皆さんは夜中２時くらいまで昔話で盛り上がっていたようです。特に今回は後輩の参加があり、落研創設の苦労話から、失敗談・笑い話・暴露話と話題は尽きなかったようです。

　翌日も朝から風呂へ。それから朝食へ。先輩諸兄は７時からガッツリ朝食食べて海岸を散策。お元気です。私は部屋に戻ってテレビをつけてのんびりダラダラ過ごしました。１０時にホテルを出発し、昼前に博多駅に着いて、午後から仕事を入れていたので即新幹線に飛び乗り、急ぎ下関に帰りました。　慌ただしい２日間でしたが　美味しい食事をいただき、ゆっくりと体を休める時間も持てました。なにより大学のあの落研の部室で笑っていた時間を思いださせてもらったことが　なにものにも代え難い思い出です。また、２年後　大阪でお会いしたいと思います。それまで　どうか皆様お元気でお過ごしください。　　(花見亭　たゆう/　千葉　里美　S53 卒)

【私の愉快な仲間たち】

はじめに

昭和５９年３月に卒業して大分に戻り県庁に就職して３２年が過ぎました。一口に３２年と言っていますが、よくよく考えれば気が遠くなるような年数です。私は昨年５５歳になりましたので、あの想い出深い下関で過ごした時の年齢のダブル・スコアを軽く超えてしまったのですね。軽い眩暈を覚えました…。

県庁の職員ですので転勤は大分県内とほぼ決まっているのですが、昨年４月に例外的な県外事務所異動になりました。３２年間考えたこともありませんでしたが、私は今福岡市に単身赴任して天神にあるビルの１０階で勤務しています。

さて、私は以前より大学の同窓会大分支部に顔を出していまして、福岡に居るのならと、昨年６月に開催された６０周年記念「全国の集い」下関に支部役員からお誘いを受けました。それもそうだなと思い、久しぶりに下関の地を訪れることにしました。そして、その会場で、下関市立大学落語研究会の創設世代である大先輩の金艶さんと楽狂さんに劇的にお会いし、そのご縁で、３週間後に志賀島で開催される「落研創設４５周年懇親会」（１泊２日）に参加することになったのです。そんな不思議なつながりや驚きの出会いがなければ、朗志（二代目関亭笑蔵）さんから依頼をされて、私が今この原稿を書いていることはなかったかもしれません。

入　部

これから、ちょっと頑張って３６年前にタイムスリップします。いきなりですが、大学の入学式の日です。私は階段を上がったところにあった学友会館の周りをうろちょろしていました。部活の見学です。高校生の頃は演劇部でしたので、とりあえず演劇部の部室を探して覗いてみました。中から髪の長い女性と一人の男性が「見学？」みたいな感じの反応だったので、「こりゃあかん」と直感し下宿に帰ろうと思い階段を降りようとしたその時、目に飛び込んできたのが白い紙に寄席文字で書かれた「落研」の看板の文字でした。ベニア板にガムテープで紙が無造作に貼り付けられた手作り感いっぱいの看板でした。その飾りっ気のないほのぼのとした雰囲気に不思議と惹きつけられた記憶があります。「おいでおいで」されているような引力を感じましたね。

部室の前まで行くと、４月ですからドアが開いていたと思います。入口に脱がれた靴が散乱していました。それはあまりいい印象ではなかったですが、むしろ部室の中でワーワー言っているのに気をとられました。と同時に数人に手や腕を引っ張られて部室に引きずり込まれました。私は笑顔で応対しましたが心の中で「この人たちヤバイかもしれない。帰らせてもらえないかも、大丈夫か…」と不安が募りました。落語のことや活動についていろいろ説明していただいたと思いますが、部員全員がとにかくワーワー言

うので結局何だかよくわからなくて、柔道部にも誘われていると伝えて改めて伺うことにしました。
「明日、授業が終わったら昼休みに来ればいい」と言われてそのとおりに部室に行ったら、すでに入部が決まったという歓白とめざしが居て、少し話をした後に皆で学食にお昼ご飯を食べに行きました。当時３年生で会長だった角輝さんが一番高かったスペシャル定食をおごってくれたと思います。確か「パチンコで勝ったから任せておけ」と言っていました。でもそれを言ったのは角輝さんご本人ではなくて同じ３年生の楽遊さんだったような気がします。楽遊さんはそういう存在感の方でいつも楽しいけど顔色が変わりやすい、面白い方でした。この二人の先輩はほんとに仲が良いのか悪いのかわからなくて、後ほどご紹介する珍事件でもこのお二人が大活躍します。
そんな光景に接しながら、私はいつしか「この面白い人たちと楽しいことができるかもしれない」という期待を膨らませ遂に入部を決心しました。歓白とめざしが先に入部していたのも大きかったかもしれません。私の入部の返答を待っていたかのように部室に居た部員の皆さん全員が大声で「万歳！万歳！万歳！」と連呼してくれました。万歳がこだまするその渦の中で今までになかったように心地良く感じていたことを覚えています。
さっそく黒板に書かれた芸名の候補から「連発」はどうかと言われ、正直あまり良いとは思いませんでしたが「いやです」というのも気がひけて、そのまま私は春好亭連発となりました。時々部室に来ては入部を渋っていた七魅がしばらくして「落語をしなくていい」という条件で入部し（それは口実でもちろん七魅はちゃんと落語をさせられました）、極端に落研を嫌っていた素比露（スピロ）は結局入部しませんでした（大学も辞めたかもしれません）。ちなみに、幻となった彼の芸名は、熊本大学落研の同学年に屁太（ヘータ）を一緒に名付けたら面白いよね、と先輩同士が申し合わせて考えられたものでした。
３年生には楽遊さんと同じ下宿の権現荘に住んでいたどぶろくさん、時々部室に現れては、鶴丸さんや十八番さんなど４年生の先輩にいじくられて裸にされたりしてとても可愛がられていた太空さん、忘れた頃に部室に来て優しく稽古を見守ってくれた粋志さん。２年生には、いつも部室でタバコを吹かしていた又三郎（後に五代目笑蔵）さん、われわれと同じ頃に無理やり入部させられた飲乱さん。同じく無理やり入部させられた同学年の小空。そんな先輩や同学年の面白い人たちに囲まれて私の落研生活はスタートし楽しい時が過ぎていきました。

みち汐事件

いろんな想い出が満載の私の落研生活でしたが、やはり衝撃的で信じられない事件として筆頭に出てくるのはこの出来事です。
２年生の頃だったと思います。山陰方向の綾羅木海岸にある飲乱さんや小空が住んでいた下宿は海の家を学生寮にしたユニークな建物でした。砂浜の上に建てられていて部屋も多かったため、マージャンを思う存分楽しめる理想郷のような環境でした。なので、その下宿は当たり前のように落研部員のたまり場となり、ある夜ほとんどの部員が集まって大マージャン大会が催されました。
半荘を何回も繰り返している内に深夜になり皆お腹が減ってきました。幸いに自動車

を持っている部員が数人いたので、皆でよく行っていた山陽方面の厚狭の海沿にあったドライブイン「みち汐」に名物の貝汁を食べにいくことにしました。概ねどのくらいの距離があるか下関に住んでいた皆さんは想像がつくと思いますが、片道１時間くらいはかかったと思います。まぁ若かったと言うか無茶だったと思います。確か車３台に分乗しての深夜のドライブですからもちろん楽しいわけでして、時間をかけて辿り着いたみし汐の貝汁の味は格別で貝の旨みが胃にしみわたりました。我々の他はトラックの運転手さんが食べているお店ですから、気兼ねはないのでここでもワイワイガヤガヤ楽しく過ごして、さぁ早く帰ってマージャン大会を再開しようぜ！というノリで車に乗って綾羅木を目指します。

下宿に到着後、部屋にわかれてマージャンが始まったと思いきや、角輝さんが「楽遊、何しとんのや！早よ部屋に戻らんか、マージャンが始められんやんか！」と叫びながらあちこちで楽遊さんを探し回っています。トイレにも駐車場にもどこにも楽遊さんは見当たりません。しばらくすると角輝さんがポツンと言いました。「あっ！そう言えば、みち汐で食べた後、楽遊がトイレに行ってくると言っとったわ」。皆顔を見合わせました。「嘘やろ。あり得んやろ」「なんでそれを車が動き出す前に言わんのか！」「そもそも同じ車に乗っていたんやろ？」。皆からそう言われると角輝さんは「トイレからなかなか出てこんから、てっきり、もうほかの車に乗ったんだろうと思った」。唖然とした皆でしたが、誰だったかしっかりした先輩が、みち汐の電話番号を調べて公衆電話からすぐに電話をして、楽遊さんがみち汐に取り残されていることを確認しました。

せっかくだから皆で迎えに行こうということになって（心配もありましたがどんな様子か見てみたいという好奇心の方が強かったと思います）、再び車３台でみち汐に向かいました。楽遊さんはカンカンでした。それもそのはずです。今ならすぐに携帯電話で連絡して迎えを求められますが、その時分ですから、我々は１時間かけて綾羅木に戻って、迎えに行くのにその後さらに１時間待たせて都合２時間ですから…。楽遊さんはたまたまですが電話を架ける持ち合わせのお金も無かったそうです。ヒッチハイクも考えたそうですが綾羅木までは無理だったようです。迎えに行った皆は笑いを堪えながら努めて同情の表情を浮かべていました。件の中心人物、角輝さんが寒々とした空気の中で楽遊さんにかけた言葉は驚くものでした。「楽遊お前、なんで早よう車に乗らんかったんか！」。楽遊さんを筆頭に周りの皆は言葉を失いました。ついでに気も失いそうでした。

ほんとに皆、愉快な人たちでした。

お楽しみはこれから

さて、突然ですが話は現在に戻ります。昨年の６月初旬です。私は、６０周年記念「全国の集い」下関に参加すべく、福岡から高速バスで下関に向かい、昔は無かった駅前のバスターミナルに到着しました。街の様子も変わっているんだろうなという予感とともにバスを降りて、ショッピングセンターを抜けながら会場のシーモールパレスを目指して歩いていた時のことです。お店の前のベンチに腰掛けている初老の女性にふと目が止まりました。「この人のことを知っている。会ったことがある」。そう直感しました。でも誰だったかをすぐに思い出せなかったので、変な様子に思われないように気遣

いながら何度もその女性の前をわざわざ通り過ぎたりしてやっと確信できました。「失礼ですが、３０年くらい前にすぐその辺りでお店をされていませんでしたか？」思い切って声をかけました。「はぁ？」と女性。勇気を振り絞ってもう一度、恥をかいてもいいと思って今度はもっとストレートに言いました。「田園のママさんではないですか？」。「はい。そうですが…」。３０数年ぶりの再会だと思いますが間違っていませんでした。落研の後輩たちと打ち上げの二次会などで飲みに行っていた田園のママさんでした。久しぶりの下関に着いた直後に知っている人と偶然会ったわけですから私はかなり興奮ぎみに言いました。「落語研究会の皆とよく行っていた中山と言います」。「そうねぇ、水産大学の人たちもよく来てくれていたのよね…」とママさん。やはり歳月には勝てないか…無理もないと少し残念に感じましたが、ママさんから「家に帰って昔の写真を見てみるわね」と言われ名刺を求められたので携帯電話番号を書き添えてお渡ししておきました。

それから１ヵ月半くらい経ったある日、携帯電話に「思い出したわよ。昔の写真あったわよ！」という田園のママさんの声。福岡に時々来るというママさんとその後日、博多駅近くの喫茶店で２時間近く昔や今の話をしました。持ってきてくれたその写真を見ながら「面白かったわね、あの頃」と言いつつ一緒に思い浮かべたママのお店、田園は数十年前に閉店して、今はクラシックのコンサートに行くのが楽しみで、お元気に各地を回っているとのことでした。

一度吹き出すと想い出はどんどん湧き出てきて、「そんなことありました？そうでしたけぇ？」とこちらが照れるようなことまで飛び出して、感激を通り越して驚いてしまいました。掲載しているのはそのときにママさんが持ってきてくれた私が卒業してすぐの頃の写真です。一番右が私で中央がママさん。一緒に写っているのは２学年下の喜六と八十六、そして下関での全国の集いで再会した３学年下の喜棚です。面白かったですね、あの頃。田園のママさん、ありがとうございます。

下関での田園のママさんとの再会のあと、志賀島で歓白にも再会でき、多くの落研の先輩たちに出会え、落研の創設期の苦労話やエピソード、屋号や芸名の云われなど、聞きたかったことや私にとってずっと謎だったことを直に知ることができました。初めてお会いできた落研の先輩の皆さんも、やっぱり愉快な人たちで、楽しい時を一緒に過ごしました。

３６年前、落研入部を決意した時に思ったこと。「この愉快な人たちと楽しいことができるかもしれない」。思えば、今も OB 会を通しての愉快な人たちとのありがたい出会いが続いています。これからも、そんな愉快で・面白い皆さんと楽しいことができるかもしれないと思うと、落研で良かったのかなと、いつの間にか、ウキウキ、ワクワクしてくるのです。　　（春好亭　連発/中山　和允　S59 卒）

【編集後記】

かねてより一度訪ねてみたいと思っていた新潟県長岡市にある市立阪之上小学校と県立長岡高校に行くことができた。この地域は日本有数の大豪雪地帯であることも承知しているので「是が非でも雪が降る前・・・」ということで 11 月に入り急ぎ両校に連絡し実現した。

長岡といえば夏の風物詩、「尺八寸の花火大会」を連想する方も多いと思うが、JR 長岡駅の改札を出ると「こどもと、毬(まり)つきをして遊ぶこと」が好きだった「良寛さま」の像がいきなり私を迎えてくれた。駅の構内に仏教都市でもないのに・・・「北陸三県と同じで越後の人々の信仰心の篤さ」をまず感じた。駅前はかなり雑然としており、徒歩で両校とも行けるのだが道が解らない。えい!や!で行き交う中年の女性に尋ねると、「内の二人の娘も阪之上小学校・長岡高校の卒業生なので」ということで 5 分ほどかかったが連れていってくれた。そこまで行けば目と鼻の先に「詩人の堀口大学や連合艦隊司令長官の山本五十六」等、数多の逸材を世に送り出した旧制長岡中学(現長岡高校)が見えた。

そして、私はどうしても長岡市民に一度聞きたかったことをこの女性との道中でぶつけてみた。「先の大戦で負けてこの方、当時の軍人については日本のどの街で聴いても悪くしか言われていませんが、山本五十六元帥はどうですか?」　戻ってきた答えは「越後の国の人たちは謙信公の時代から、他国に攻め入ることはしない平和志向の国柄で、戊辰戦争や先の大戦は止むに已まれぬ中で行われたことで、長岡空襲でも多くの一般市民が犠牲になりましたが、それでも元帥を恨む人は長岡にはほとんどおりません」ときっぱりと言われた。それは原爆投下を受けた広島や長崎の市民感情とも異質のものであった。いつの時代においてもそうだが平和を望まぬ人はいないだろう。ただ、人の行う行為で最も劣悪な戦争というものにおいても「善か悪か」の二者選一の極端な意見は現に慎むべきものだと思う。

さて、下関と長岡は遠く離れているようですが大いに関係もあります。明治維新における戊辰戦争で攻め入ったのは薩長軍で、守り・敗れ・廃墟となったのが長岡藩です。その明治維新に影響を与えた江戸の佐久間象山塾で二虎と評されていたのが、長州の吉田寅次郎(吉田松陰)と廃墟となった長岡復興のため尽力し「米百俵」で名を馳せた長岡藩の小林虎三郎の二人です。官軍・賊軍と相対した立場でありましたが、ともに後世に数多くの優れた人材を育みなした教育家であったことだけは間違いなさそうです。

ちなみに小林虎三郎が明治 3 年に創設した国漢学校の流れを阪之上小学校・長岡高校両校とも引き継ぎ、当時の貴重な資料も多数保管、一般に無料で見せてくれます。訪問

した際、阪之上小学校では毎年 12 月に開かれる長岡市民向けの「英語による米百俵」公演練習風景も見学することができました。また、長岡高校では「創立 150 年史」の編纂に取り掛かられていました。最後に旧制長岡中学は戦後学制の変更で新制長岡高校となり、OB 堀口大学作詞の校歌が新たに制定されていますが、公式行事においてまず歌われるのが旧制中学時代の第一校歌です。この校歌をお伝えして編集後記といたします。(編集局長)

作詞・原作　本富　安四郎　　原作曲　植村　クニ

一、
我が中学の其の位置は　構(かまへ)は八文字浮島の
兜(かぶと)の城と名も高き旧城跡を前に見て
峨々たる嶮峰鋸(けんほうのこぎり)は其の東面に天を指し
本島一の大河なる信濃川は其の西に
汪洋広野を浸しつつ北海さして流れゆく
二、
清秀雄偉の山川の感化を受くる我が校は
明治五年の冬の頃洋学校の開始より
爾来(じらい)変遷定めなき世の辛酸を凌(しの)ぎ来て
各科の学士文武官民間官途の別(わか)ち無く
名有る人物出ししは幾百人か数知れず
三、
殊(おと)に聞こえし和同会剛健忠武の熱血を
維新の歴史に濺(そそ)ぎたる彼の先輩の烈を継ぎ
勇壮活潑一千の健児の心に二つなく
団結いとど固くして風紀の殊に厳なるは
天下中学多けれど恐らく類稀(たぐひまれ)ならむ
四、
斯(か)かる名誉の閲歴(えつれき)を伝へ来りし我が校に
学べる我等学生のその責任やいと重し
重き責任負へる身に軽き振舞許さめや
開校以来数十年汚(けがれ)無き名を汚れしめ
此の山川に背かむも唯我が覚悟次第なり
五、
いでや是より諸共に学びの道に油断無く
互に励み励まされ心を磨き身を修め
あっぱれ有為の人となり世に大業を為し遂げて
我が中学の誉をば末代までも伝へなむ
我が中学の誉をば末代までも伝へなむ